

笠置寺の歴史

京都府の南端、奈良県に接する笠置山の歴史は古く、有樋式石剣（ゆうひしきせつけん）が出土していることから、山内に点在する巨石は、弥生時代には神として、自然崇拜・磐座信仰（いわくらしんこう）の場として人々の信仰の対象となっていたようです。

笠置寺に伝わる『笠置寺縁起』によると、六〇〇年代に入り天智天皇の時代、皇子の発願により弥勒磨崖仏（みろくまがいぶつ）が巨石に刻まれ、六八三年に寺院が建立されたと伝えられています。

七四三年、聖武天皇は紫香樂の宮（現在の滋賀県甲賀市）において大仏建立の詔を告げられ、東大寺の大仏造営が始まりました。

この事業の責任者であった良弁和尚は、信樂や伊賀で切り出した材木を、奈良まで無事に届けられるようにと、笠置の龍穴において雨乞いの修法を行い、無事に完成することができたのです。

良弁和尚の弟子、実忠和尚は、笠置の龍穴より弥勒菩薩の世界へと進み、常念観音院（じょうねんかんのいん）において行われていた観音悔過行（かんのんげかぎょう）を習得し、七五二年一月一日、笠置山正月堂にて修正会として修法されました。悔過行とは、十一面観音をご本尊に自らの行いを悔い改める法要です。

この法要は、同年二月、場所を東大寺に移し、修二会として行われ、これが現代まで欠かすことなく行われている「二月堂お水取り」と呼ばれる修法です。

やがて山内には五十ほどの寺院が建立され、修験道の行場として、清少納言の『枕草子』に「寺は壺阪 笠置 法輪・・・」と記されるまでになりました。

一一九三年、興福寺の僧 解脱房貞慶は、釈迦の心を忘れた南都仏教界から笠置山に移り、ここを拠点に、より自由な立場で、仏教の原点回帰に尽力され、諸堂を整備された後、観音様への信仰を深め、海住山寺へと移られました。

笠置山が最も栄えた鎌倉時代、南朝と北朝が並び立つ南北朝となり、南朝 後醍醐天皇は倒幕計画を画策するも失敗、一三三一年、京の都より、東大寺、鷲峰山（和束町）を経て笠置山に御所を構えられました。鎌倉幕府軍を迎え、一ヶ月に渡る戦いの結果敗北、笠置山は全山焼亡し、天皇は隠岐島へと流されました。これを元弘の乱と呼びます。

元弘の乱によって衰退した笠置山でしたが、東大寺や藤堂藩の力添えもあり、徐々に復興し、江戸時代には無住の時期もありましたが、明治時代に入り大倉丈英和尚が入山、真言宗智山派の寺院として現代に至っています。